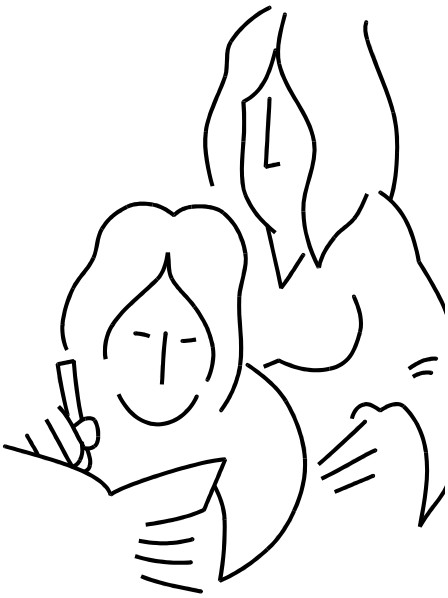
はしら、その一

松本康子

現地校の成績表に "Use time wisely" という項目があるのをご存知だろうか。私がこれを初めて知ったのは、次女のキンダーガーデンでの個別相談の際、直接、先生からこの事を注意された時だった。

次女のクラスは、30 人編成のクラスに 12 人も日本人生徒がいるという、典型的なバイリンガル・クラスだった。先生から次女の学校での生活をうかがうのは、この個別相談の時が初めてだった。先生は、長年、日本人と付き合ってきた経験から、学校の評価は、成績だけでなく、生活態度も重要なのだという事を、まず、注意された。アメリカの学校、特に小学校の時期は、成績は言うに及ばず、生活態度の評価をよく見て、評価の悪かった点は、家庭で補うようにとアドバイスしてくれたのだ。それが、"Use time wisely" だった。



次女は、周りの子供の面倒見がいいためか、与えられた課題を終わらせるのに、時間内にできた事があまりなかったらしい。先生から、「自分の事がすんでから、他の子を手伝えばいいのよ」と何度言われても、ついつい手伝ってしまうらしい。また、家から持ってきた赤ちゃんの頃の自分の写真を使い、両親や姉妹の絵を描き、それに簡単な文章をそえて、一つの家系図に仕上げる「私の家族」という課題を出された時などは、描きたい事や飾りたいことが余りに多すぎたのか、やはり時間内に提出できなかったというのだ。もちろん、キンダーガーデンの子供だから、課題を時間内にすませられない子供はたくさんいるが、だからと言って、すませられないままにしておくのは、決して良い事ではないと、注意を受けたのだった。

漠然と見ていた成績表が、実は、日本の教育しか知らない私自身がイメージする子育てについて、アメリカで子育てするという意味を考えさせるキッカケとなった。

個別面談の後、私は自分自身の目で次女の様子を確かめるため、直ぐにクラスのボランティアとして名乗りを挙げた。子供の様子を見る最適な方法だと、前から夫に薦められていたからだ。先生に相談すると大歓迎してくれ、何をしたいかも聞いてくれた。なるべく言葉を使わずに出来る仕事を教えてもらい、出来そうな事からやらせてもらう事にした。ボランティアの仕事と言っても様々で、学校運営に関わることから、クッキーを焼いてクラスに持っていくだけというものまであった。私が選んだのはごく簡単なもので、クラスで使ういろいろな材料を、先生の代わりに準備するだけの仕事だった。先生から頼まれる事さえ理解すれば、決して難しい英語を使う必要もなく、また、授業時間にクラスでする仕事だった事もあり、すぐ参加させてもらった。

しばらくは、次女の様子を見がてら、ボランティア仕事として画用紙を花形に切ったり、宿題のプリントをコピーしたりした。そのうち、私の興味は次女からクラスの子供の様子に移っていった。出来上がってくる子供の作品を見たり、返ってきた宿題を見たりして、気付いたことがあった。クレパスで塗った絵は決してきれいな物でなく、また、プリントなども、私には読めそうにない字を書いている子供が、ほとんどだったのだ。それでも、先生は、「よく上手に描けたね、文章にしたね。」と褒めていた。これでは、次女が課題を時間内に提出できないのも無理はなかった。

キンダーガーデンに上がるまで、家庭でいろいろな遊びをさせた。その一つに「針仕事」がある。子供の好奇心は、大人のする事に向く傾向があるのか、我が家の子供たちは、私のする事を一々真似したがった。三人の子供にも子供用の刺繍の材料や布地を与えて、いろいろな物を作らせてい